

## 野上記念法政大学能楽研究所

## I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2018年度大学評価結果総評】(参考)

能楽研究所は、2017年度も極めて活発な研究活動を行っており、特に5回の一般公開の催しを開催していることは、能楽研究の成果を広く社会に還元する点から高く評価できる。能楽という限られた世界の議論にも拘わらず、外部組織からの論文引用が多いことは特筆すべきことであり、成果の波及効果の高いことがうかがえる。引き続き、法政大学の能楽研究所の存在を国内外に広めてほしい。

2017年度より情報メディア教育研究センターとの共同プロジェクトを始めたことは優れた取り組みであり、理系教員との協同によるさらなる具体的な成果を期待したい。学外との研究協力体制については、立命館大学アート・リサーチセンターと包括学術協定が結ばれたことは大きな進展であったが、国際的なネットワーク構築については引き続き検討していただきたい。海外の著名な研究者を招待したコロキウムの開催なども、良い機会となり得るだろう。

## 【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- 1) 理系教員との協同：①情報メディア教育研究センターとの連携については、同センターの教員に当研究所を拠点とする共同研究に加わってもらい、ウェブ上での成果発信の方法、効果的なデータベースの構築等について多くのアドバイスを得た。デジタルアーカイブの充実についても、センターのサポートを受けている。②情報科学部の教員との共同研究(科研・基盤C)も継続中で、さらに別の共同研究の参加者と情報科学部の教員を繋ぐなど、研究コミュニティの拡大につとめている。③スポーツ研究センター教員との能の所作に関する共同研究も継続中である。④デザイン工学部建築学科の教員・学生との共同研究プロジェクトで、「江戸城能舞台と弘化勲進能」の工学的な復元の成果をまとめた。
- 2) 学外との研究協力：①大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館と学術交流・協力に関する基本協定を締結した。②国際的なネットワークの構築については、立命館大学アート・リサーチセンター、コーネル大学、京都産業大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校などに所属する研究者が集まり、JPARC (Japanese Performing Arts Research Consortium) を組織し、活動を始めた。ウェブサイトの開発・保守は他大学が担当し、当研究所はコンテンツの開発やそのための資料画像の提供を行っている。このほか、2018年度にはプリンストン大学(招聘)とハンブルク大学(先方の予算による出張)から研究者が来日し、現在進行中の共同研究プロジェクトに関わる作業を行った。また、ベネチア大学のボナベントゥーラ・ルペルティ教授を交換研究員として受け入れた。

## 【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

能楽研究所では、情報メディア教育研究センターとの連携を深め、ウェブ上での成果発信や能楽資料デジタルアーカイブの拡充を図るなどの成果を出している。情報科学部やスポーツ研究センターの教員との共同研究を継続し、またデザイン工学部建築学科の教員・学生との共同研究プロジェクトで成果を挙げていることも、能楽研究が対象とする研究領域を拡大するものとして優れた取り組みである。学外との研究協力についても、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館と学術交流・協力に関する基本協定を締結したこと、またJPARCを組織し、活動を始めたことは大きな進展であった。さらに、2名の国外の研究者が『英語版能楽全書』の出版に向けた共同研究プロジェクトに参加したり、ベネチア大学の教授を交換研究員として受け入れるなど国際的なネットワークの構築に励んでいることは評価できる。引き続き、学外との研究協力・研究交流について努力されることが望まれる。

## II 自己点検・評価

## 1 研究活動

## 【2019年5月時点における点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

## 1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2018年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

## ①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2018年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

○研究集会「能楽資料研究の可能性」於スカイホール 10月21日(参加者64名)

「江戸時代の能役者の履歴書を読むー『近世諸藩能役者由緒書集成』の刊行に向けてー」宮本圭造、「江戸時代初期出版

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

史の中の謡本の出版—古活字玉屋謡本の表紙裏文書を通して— 落合博志（国文学研究資料館教授）、「能作品の仏教語句を考える」高橋悠介（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）、「能楽伝書類の国語学的研究 —規範と記述の問題—」豊島正之（上智大学教授）。

- シンポジウム「哲学・医学・能—よく生きるためのまなびとあそび—」於スカイホール 11月24日（参加者135名）  
「夢の感覚・この場所の記憶—夢幻能のしくみと魅力—」山中玲子、「能楽と医学の接点 意識のあわい」稲葉俊郎（東京大学附属病院循環器内科医助教）、「魂と風と聖霊と」山内志朗（慶應義塾大学文学部教授）。
- 特別展示「和語表記による和様刊本の源流」 於武蔵野美術大学美術館 11月～12月（武蔵野美術大学との共催）
- 能楽資料デジタルアーカイブの拡充  
「伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ」171点の画像と解題のデータベースを作成（通年）。
- プロジェクトごとの研究会
  - ・日本学術振興会「領域開拓」プログラム「テクノロジーの革新と日本の美学および感性」（代表：中川志信〔大阪芸術大学〕・能楽研究所客員研究員）の研究会：  
8月8日（代々木能舞台）、8月21日（矢来能楽堂）、11月15日（大阪芸術大学スカイキャンパス）、12月8日～9日・3月4日（いずれも能楽研究所会議室）。
  - ・『英語版能楽全書』出版に向けた研究会、編集会議（代表：山中玲子）：  
6月9日～12日（プリンストン大学トム・ヘア教授来日）、7月30日（ハンブルク大学アイケ・グロスマン准教授来日）。
  - ・「能楽伝書の国語学的研究」（代表：豊島正之〔上智大学〕・能楽研究所兼任所員）の研究会：  
9月20日（能楽研究所会議室）。
  - ・依頼型共同研究「間狂言資料集成の作成とアイ語りを視点とする夢幻能の再検討」（代表：西村聡〔金沢大学〕・能楽研究所客員研究員）の研究会：  
9月14日・12月17日・3月8日（いずれも能楽研究所会議室）。
  - ・依頼型共同研究「能作品の仏教関係語句データベース作成と能の宗教的背景に関する研究」（代表：高橋悠介〔慶應義塾大学〕・能楽研究所兼任所員）の公開研究会：3月13日（BT19階D会議室）。
  - ・能楽研究所蔵『能之秘書』に関する所内研究会：3月22日・25日（いずれも能楽研究所閲覧室）。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・野上記念法政大学能楽研究所 JOURNAL vol. 8

**②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）**

※2018年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

\*研究所としての刊行物

- ・『能楽研究』43号（専任所員の論考3本、兼任所員の論考1本、外部からの寄稿2本などを収録）2019年3月刊
- ・能楽資料叢書5宮本圭造編集『近世諸藩能役者由緒書集成 上』（全464頁）2019年3月刊

\*専任所員の研究成果

山中玲子「∞（無限大）を抱えた静止 — 能の身体表現 —」（観ノ会パンフレット 9月）

“Mugen no: Dreams, Memories and Recollections”（『能楽研究』43号 3月）

（口頭発表）

“Noh Reimagined 2018 Opening Talk”（英語）、Noh Reimagined 2018 6月29日、ロンドン・キングスプレイス

“Noh Mask, Noh Movement: Illusory Devices”（通訳付き）、同上 6月30日、ロンドン・キングスプレイス

“Variant stage directions in Noh: signs of creativity or authority?”（英語）。

国際研究集会 CREATION, PRESERVATION, AND TRANSFORMATION OF THEATRE TRADITIONS: EAST AND WEST 11月21日、テルアビブ大学

宮本圭造「観世家のルーツを辿る旅」（『観世』85巻6号 6月）

「土佐山内家の能楽」（国立能楽堂開場35周年記念特別展図録『土佐山内家の能楽』8月）

「土佐山内家の能狂言面と山内容堂」（同上）

「「光悦謡本」とその時代」（特別展図録『和語表記による和様刊本の源流』 11月）

「能役者たちの「明治」」（『国立能楽堂』424号 12月）

「囃子方諸流の成立と系譜」（国立能楽堂開場35周年記念企画展図録『囃子方と楽器』1月）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

「面打井関備中守追考」(『能楽研究』43号 3月)  
「面打角坊考」(同上)  
(口頭発表)  
“Noh Mask, Noh Movement: Illusory Devices”(通訳付き)、Noh Reimagined 2018 6月30日、ロンドン・キングスプレイス

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

### ③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対して2018年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2018年度

- ・能楽研究所が公開しているデジタルアーカイブのアクセス数(2019年1月下旬集計)は、「能楽資料デジタルアーカイブ」が17,007件、「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」が18,613件である。
- ・雑誌『金春』に、能楽研究所で公開している金春家旧伝文書デジタルアーカイブに関する詳しい紹介記事が載り、その中で専任所員1名の論文が引用されている。
- ・研究所が2017年に刊行した刊行物『近代日本と能楽』『金春家文書の世界』の紹介記事が、能楽学会誌『能と狂言』、楽劇学会誌『楽劇学』にそれぞれ掲載された。
- ・専任所員1名が執筆した展示図録及び論文の紹介記事が、芸能史研究会の学会誌『藝能史研究』に3件掲載された。
- ・2018年6月にロンドンで開催されたNoh Reimagined 2018のうち、能楽研究所の所員2名が関わった催しはどちらも観客のアンケート(国際交流基金が実施)において高い評価を得ている(添付資料参照)。
- ・能楽研究の第一線で活躍してきた研究者2名の著書『歌舞能の系譜』(ペリかん社)、『描かれた能楽』(吉川弘文館)、にそれぞれ専任所員2名の論文が引用されている。また、中世芸能史の研究で著名な著者による『幸若舞の展開』(三弥井書店)、博士学位論文の活字化である『謡曲「石橋」の総合的研究』(勉誠出版)にも、それぞれ専任所員各1名の論文が引用されている。
- ・なお、『鴻山文庫蔵能楽資料解題(上・中・下)』やわんや書店刊の能楽資料集成のシリーズなど、能楽研究他の基本資料となる刊行物からの引用、個々の雑誌論文における引用は全て把握しきれないため、省略する。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・<https://noh.muarts.org.uk/event/noh-reimagined-opening-talk/> (opening talk)
- ・<https://noh.muarts.org.uk/event/noh-neuroscience-glimpsing-the-invisible/>
- ・国際交流基金実施のアンケート集計(2種類)

### ④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2018年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会の細かなチェックを受けている。特に2018年度は、同拠点第一期の期末評価があり、過去6年間の活動について詳細なチェックと研究活動に関するアドバイスを受けた。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文部科学省 特色ある共同利用・共同研究拠点の期末評価結果等について(通知)

### ⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2018年度中に応募した科研費等外部資金(外部資金の名称、件数等)および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金(外部資金の名称、件数、金額等)を簡条書きで記入。

\*2018年度中に応募した科研費等外部資金

- ・科学研究費補助金基盤(B)「大名家道具帳のデータベースに基づく古典籍・能道具の伝来についての総合的研究」(研究代表者:宮本圭造)

\*2018年度中に採択を受けた科研費等外部資金

- ・科学研究費補助金基盤(B)「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究」(研究代表者:山中玲子、2018年度直接経費310万円)
- ・科学研究費補助金基盤(B)「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」(研究代表者:宮本圭造、2018年度直接経費140万円)

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・特になし
-------

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

## 【この基準の大学評価】

<p>能楽研究所では、研究集会「能楽資料研究の可能性」とシンポジウム「哲学・医学・能—よく生きるためのまなびとあそび—」の開催や『能楽研究』の刊行、ロンドン・キングスプレイスでの「Noh Reimagined 2018」における研究発表など、広く国内外に成果を公表しており、高く評価できる。研究成果に対する社会的評価についても、デジタルアーカイブや刊行物の紹介記事が1つの雑誌と3つの学会誌に掲載され、特に「能楽資料デジタルアーカイブ」と「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」へのアクセス数がそれぞれ17,007件と18,613件と多く、高く評価されていることが分かる。定期的な外部からの評価は受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員からなる運営委員会から評価を受けている。科研費等外部資金の獲得状況については、2つの課題が採択されており評価できる。</p>
--

## III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。	
	年度目標	貴重資料デジタルアーカイブの充実をはかりつつ、研究成果を研究発表、論文、能楽研究叢書、能楽資料叢書等の形にしていく。 旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力・研究交流に努める。	
	達成指標	デジタルアーカイブに60点追加。能楽研究叢書1冊、能楽資料叢書1冊を刊行。 新領域に関わるシンポジウム1回以上、主催または参加。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		170点(100冊揃いも1点と数える)あまりの貴重資料をデジタル化し、公開。哲学・医学の視点から能の特色を考えるシンポジウムを開催。能楽資料叢書(464頁)1冊を刊行。能楽研究叢書は刊行にいたらず。	
改善策	少数のメンバーで目標を欲張りすぎた実感があるが、今年度に出せなかった能楽研究叢書は来年度の刊行をめざしたい。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。	
	年度目標	研究成果は各種セミナー、シンポジウム等で公開するほか、国内外の教育機関と連携し、ウェブ上に英語で発信していく。 作品研究・演出研究の成果を能の字幕システム構築事業に提供し、能楽の普及に役立てる。	
	達成指標	資料展示、セミナーまたはシンポジウムを2回以上開催。学外機関での催しへの学術的協力を2回以上。字幕解説30曲以上。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		研究集会「能楽資料研究の可能性」、シンポジウム「哲学・医学・能」を主催。国立能楽堂、武蔵野美術大学等の大規模な資料展示への学術的協力、アーツカウンシル東京の外国人向け	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		能楽講演への学術的協力、ロンドン・キングスプレイスでの Noh Reimagined 2018 への参加及び学術的協力等を行った。字幕解説は実際の公演で使用可能な処理も終わった曲数が 33 曲。監修済みが約 49 曲。
	改善策	特になし

## 【重点目標】

## 社会貢献・社会連携

旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力・研究交流に努める。研究所所蔵の資料をできるだけ広く活用してもらえよう学外と共催の展示などを企画していく。学術的成果が確実に期待できるシンポジウム等とは別に、領域を広げることを目的とするセミナーやシンポジウムを企画する。

## 【年度目標達成状況総括】

重点目標とした「旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力・研究交流」は予想以上の進捗を見た。医学・哲学の研究者を招いてのシンポジウムは、まずは話題作りになれば良いとの判断だったが、医学関係者はロボット研究者たちとの共同研究に加わることになり、実質的な研究協力が始まっている。また、特別貴重本である光悦謡本 100 冊をまとめて武蔵野美術大学の研究プロジェクトの展示に貸し出す、ロボットの顔デザイン資料として能面を貸し出すなど、資料の活用範囲も従来とは異なった方面にも広がっている。研究活動は十分活発に行ったつもりだったが、他のいくつかのプロジェクトと併行して能楽資料叢書と能楽研究叢書を一度に刊行するのは無理があった。

## 【2018 年度目標の達成状況に関する大学評価】

能楽研究所の研究活動に関しては、170 点あまりの資料のデジタル化、新しい領域に関わるシンポジウムの開催、能楽資料叢書『近世諸藩能役者由緒書集成(上)』の刊行など、能楽研究叢書の刊行以外の年度目標の達成状況はほぼ適切である。社会貢献・社会連携に関しても、研究集会やシンポジウムの開催、武蔵野美術大学美術館での特別展示「和語表記による和様刊本の源流」、33 曲の字幕解説など活発に行っており、高く評価できる。今後は、「旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力、研究交流」で「医学・哲学・能」として実質的な研究協力が始まっていることは評価できる。国内外との連携をさらに進め、学際的、国際的な能楽の研究拠点として研究成果の社会への還元が期待される。

## IV 2019 年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	研究所を拠点とする多様なスタイルの共同研究をみずからも推進し、かつサポートする。貴重資料の整理・公開を進め、研究成果を、研究発表、論文、能楽研究叢書、能楽資料叢書等で発信していく。
	達成指標	能楽研究叢書または能楽資料叢書を 1 冊以上刊行。研究所主体または公募による共同研究を 10 件以上実施する。
No	評価基準	研究活動
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	主催するセミナーまたはシンポジウムで研究成果還元をはかるほか、国立能楽堂、アーツカウンシル東京をはじめとした各地の博物館や演能団体等に協力し、資料展示や講演、外国人を含めた新しい能楽の観客層拡大に向けての講座・解説等を行う。
	達成指標	セミナーまたはシンポジウムを 1 回以上開催。学外機関での催しへの学術的協力、能楽界と協力しての観客層拡大等を、3 回以上実施する。
【重点目標】		
研究活動		
共同利用・共同研究拠点にふさわしい多様な共同研究を進めていく。		
従来の研究資金支給型の共同研究に加え、施設や資料を提供するタイプの共同研究も公募する。理工系・社会学系の研究者たちに共同研究を呼びかける。		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

**【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】**

能楽研究所では、研究活動と社会連携・社会貢献について、中期目標を適切に設定し、年度目標と達成指標も具体的に掲げている。特に、中期目標として「能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与する」を設定し、「外国人を含めた新しい能楽の観客層拡大に向けての講座・解説等を行う」という年度目標を掲げ、能楽界と協力して観客層の拡大を図ろうとしていることが、評価できる。

**【大学評価総評】**

能楽研究所の研究・教育活動は、研究集会やシンポジウムの開催、特別展示、能楽資料デジタルアーカイブの拡充、プロジェクトごとの研究会など活発な活動が実施されており、高く評価できる。対外的な研究成果の発表に関しても、『能楽研究』や能楽資料叢書の刊行、2名の専任所員による研究成果など、評価できる。立命館大学アート・リサーチセンター、コーネル大学、京都産業大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校などの研究者と JPARC を組織し、活動を始めたことは優れた取り組みであり、その成果が期待される。

能楽研究所は、1952年に能楽研究の発展と能楽の振興を目指して設立され、3年後には創設70周年を迎える。学際的・国際的な能楽研究の拠点としての能楽研究所の存在を、国内外に広めることが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。